

OTOGAWA

愛知県岡崎市の乙川リバーフロント地区では、2015年から主要回遊動線「QURUWA(くるわ)」を中心に、豊富な公共空間を活用した複数の社会実験を通して、公民連携プロジェクトを立ち上げ、「QURUWA戦略」としてエリアの再生に取り組んでいます。

QURUWA 

自分たちの
まちが
できるまで

GRAND DESIGN

乙川リバーフロント地区の
公民連携まちづくり
5年目の取り組みを収録。

CONTENTS

02 PROJECT SUMMARY

2016年度QURUWA#4の年

03 TALK EVENT QURUWAジョイント

04 QURUWA PROJECT

1: 太陽の城跡地の事業者決定 2: 桜城橋の完成とPFI事業者決定

3: 東岡崎駅周辺および北東街区有効活用事業

4: おとがワンスターランド 岡崎泰平の祈り 5: 龍田公園リニューアル

7: 道路再構築事業 康生通り・連元通り

13 PROJECT REPORT QURUWA LIFE HACK クリエイティブ人材育成支援事業「INC」

15 SYMPOSIUM QURUWA新章突入

18 RELATED PROJECT

QURUWA講演会&意見交換会

「ゆるいながら図書館」QURUWA菜園

19 CONFERENCE 2016年度デザイン会議

進む
QURUWA
プロジェクト
Vol.7

プロジェクトサマリー

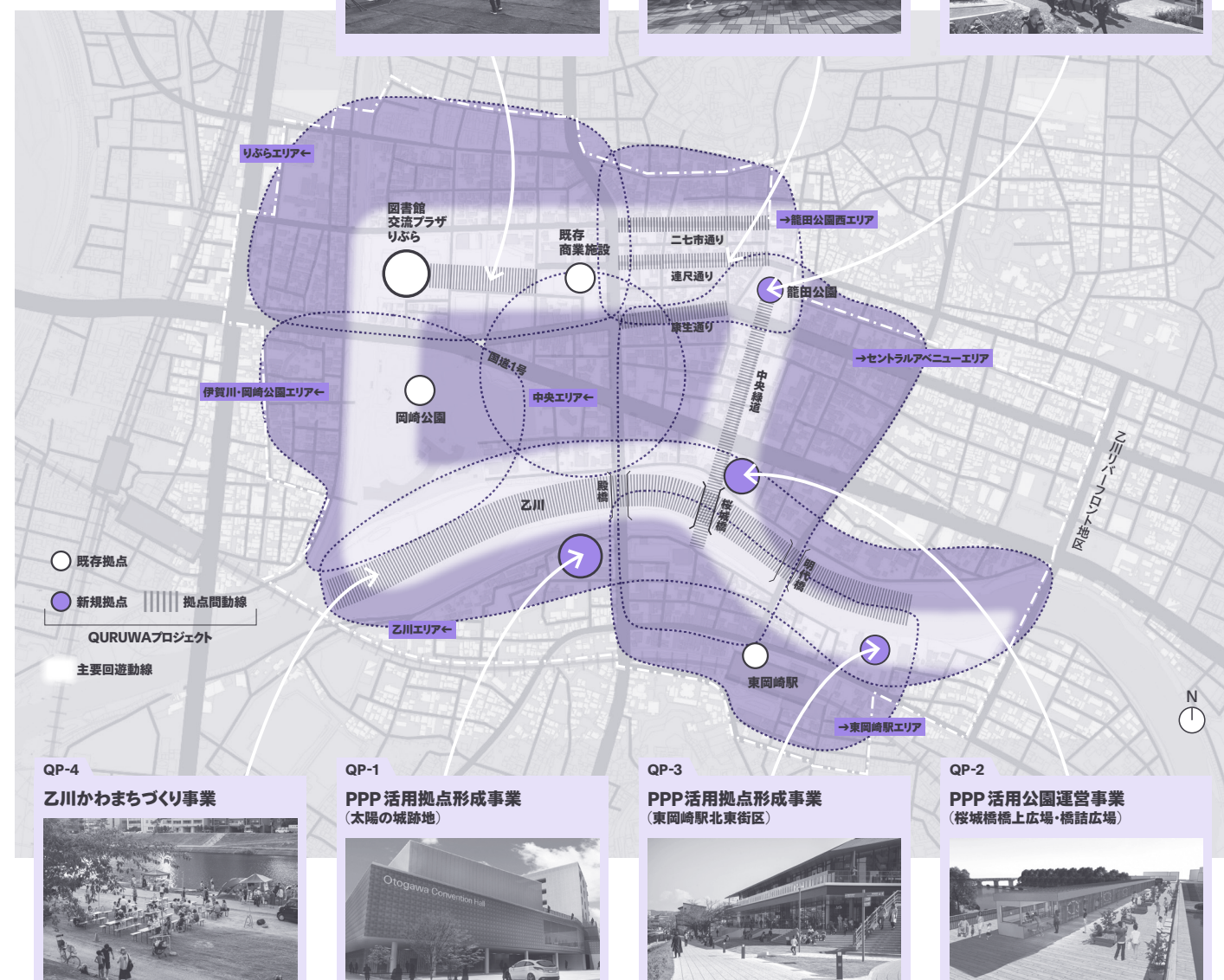
2019年度 QURUWAの まちづくり

「おとがわプロジェクト」の3年間の成果として策定された「QURUWA戦略」を受け、2015年からはじまる乙川リバーフロント地区のまちづくり5年目となる2019年度は、公民連携プロジェクトがさらに歩を進める年となりました。

本紙では、QURUWA戦略に定められた7つのQURUWAプロジェクトのうち、2019年度の主な動きをお届けします。
今年度の主なトピックとしては、東岡崎駅周辺および北東街区有効活用事業【→P.06】、2019年7月の籠田公園リニューアル【→P.08-10】、2020年3月の桜城橋完成【→P.05】など、QURUWAプロジェクトにおける重要な拠点のオープン/リニューアルオープンがありました。継続的な取り組みとしての「おとがわワンダーランド」や「岡崎泰平の祈り」【→P.07】、道路再構築事業【→P.11-12】、QURUWAシンポジウム【→P.15-17】もあれば、今年新たに実施したトークイベント「QURUWAピク

ニックトーク」【→P.03】、官民連携を進めるイベント「QURUWA LIFE HACK」【→P.13】、クリエイティブ人材育成支援事業「INC」【→P.14】、また講演会「そとつながる図書館」や「QURUWA菜園」【→P.18】の取り組みにもご注目ください。
重要拠点の完成のみならず、桜城橋の橋上広場と橋詰広場の整備運営事業【→P.05】や、太陽の城跡地活用「岡崎市QURUWAプロジェクト（コンベンション施設整備事業等）」の事業者が選定【→P.04】された今年は、今後の拠点形成をうらなう重要な選択の1年でもありました。

2019年度 プロジェクトの動き



トークイベント

QURUWA ピクニックトーク

QURUWAピクニックトーク#1

日時: 9/28[土] 17:00-18:30
@乙川ナイトマーケット
場所: 乙川河川敷
運営: NPO法人岡崎まち育てセンター・りた

QURUWAピクニックトーク#2

日時: 10/14[月・祝] 17:00-18:30
場所: 籠田公園
運営: NPO法人岡崎まち育てセンター・りた

市民自らまちを能動的に使いこなし、まちを歩く楽しさを見出すきっかけをつくる、ということをもテーマにしたトークイベント「QURUWAピクニックトーク」を開催しました。

QURUWAの回遊を実現するためには、まだコンテンツの数も密度も十分ではありません。仮にQURUWAプロジェクトが実現しても、拠点事業者や一部の民間事業者が提供するコンテンツを受動的に受益・消費するだけでは、事業者頼みでその質に左右され、相乗効果や波及効果が生まれにくく、エリアの価値の向上につ

ながりません。拠点が形成されてもピンポイントで移動する行動様式が変わらなければ回遊性は高まらないでしょう。

そこで、コンテンツを増やし、密度を上げる動きと並行して、事業者市民以外の「フツー市民」の関わることを生み出すことを兼ねて、「市民自らまちを能動的に使いこなすこと」「まちを歩く楽しさを見出すこと」を喚起したい、というのがこの企画の前提です。その目的は、「まちへの感度を高め、まちを楽しむ人を増やす」こと。

シンポジウム自体が公共空間活用のお手本となり、目的としてシンポジウムに来る人以外の「まちをすでに楽しみ始めている層」を巻き込みます。ピクニック形式で、ドリンク片手に気軽に参加でき、周辺にいる人も緩やかに出入りできる雰囲気をつくりました。会場となったのは、乙川河川敷と籠田公園。30から50名程度の小規模な「ポップアップシンポジウム」です。

1回目は、乙川河川敷で開催。同日、隣では、乙川ナイトマーケットが賑わいを見せていました。Aグループ: お客さんを連れていくと喜ばれる「場所」、Bグループ: 子どもと(が)一緒に行きたい場所、Cグループ: 伝えたいお気に入りの風景や物語、という3つのテーブルでディス

カッション。「QURUWAエリアから少し離れたエリアに住んでいる。QURUWAエリアで食事やお酒を愉しんで帰りたいが、交通手段が無いのが残念。」「籠田公園、伊賀川、りぶらなど、結構子育て環境が充実していることに気づいた。」という声が聞かれました。

続く2回目は、籠田公園で開催。「A.すでに動き始めている人」から「B.潜在的な使い手」に、その思いやノウハウを伝えてもらい、能動的にまちを使いこなすきっかけをつくることを目的に、「QURUWAで見つけたまちの楽しみ方、気になるところ」「もっと楽しむためにあるとよいもの・必要なもの」というテーマでABCDの4グループに別れてディスカッション。「QURUWAのMAPをつくってまち歩きを企画を開催したこともあります。思いっきり社会実験を楽しんで発信していきたいです。」など、すでに活動を始めている人たち側の視点からの発言が見られました。

最後にQURUWA戦略の総合プロデュースを務める清水義次氏から、まず雨天時にも関わらずこうした話し合いの場が生まれたことへの称賛の声があがりました。その後、「QURUWAの中だけでなく、外ともつながっていくことで岡崎らしい魅力が高まっていくのではないかな。」という、今後の展開に期待がなされ、2日間にわたるピクニックトークに幕が下ろされました。



籠田公園にて



乙川河川敷にて



籠田公園にて

QURUWAプロジェクト-1

太陽の城跡地の事業者決定

「まち・ひと・かわを結ぶ交流拠点」を実現するために民間資金・経営能力・技術的能力の活用を図る公民連携事業として公募をすすめていた「岡崎市QURUWAプロジェクト(コンベンション施設整備事業等)」について、優先交渉権者を選定しました。

- 優先交渉権者**
- 酒部建設グループ
- ・酒部建設株式会社
 - ・三菱地所株式会社
 - ・株式会社スノーピーク
 - ・ビジネスソリューションズ
 - ・ホームックス株式会社 岡崎支店

岡崎市QURUWAプロジェクト(コンベンション施設整備事業等)は、2019年9月に事業者の公募がはじまり、参加資格審査、競争的対話を経て、翌2020年には提案書の審査とヒアリングがおこなわれ、同年2月に事業者が決まりました。

コンベンション事業は、既存施設(旧教育文化

館等)を解体撤去後、ホール・会議室等の公共施設(「コンベンション施設」)を設計・建設、維持管理及び運営する、というもの。

- ア「観光産業都市の創造に資する施設」
- イ「持続可能な社会の創造に資する施設」
- ウ「生きがいづくりや健康づくりの支援に資する施設」
- エ「市民の誇りとなる施設」
- オ「誰もが平等に使える施設」

という5つの指針に沿って提案が求められました。

このコンベンション事業は「ホテル等民間収益施設事業」(「ホテル事業」)と「乙川河川緑地管理運営事業」(「乙川河川緑地事業」)とあわせて実施することで、基本計画に示す次の3つの基本目標を達成することを目標として、市有地である太陽の城跡地(岡崎市明大寺本町一丁目地内)を有効利用し、民間の資金や、経営能力・技術的能力等のノウハウを活かした公民連携手法を活用しておこなわれます。

- ①「コンベンション機能を活かした観光産業都市の創造」
- ②「仕事・暮らし・健幸を応援する生きがい交流空間の創造」
- ③「乙川エリアの価値を高める魅力的な都市空間の創造」



ホテル内装イメージ | 画像は提案時のイメージです

酒部建設グループの評価ポイントとして、コンベンションホールやホワイエを2階に配置することで乙川への眺望に配慮した点や、本市初となる宿坊型ホテル誘致のほか、建物と河川空間の間に位置する堤防道路を歩行者化することで河川空間との一体化を図る斬新なアイデアなど、QURUWAエリアへの波及効果を意識した優れた内容であったことから、公民連携で進めるまちづくりのパートナーとして、最もふさわしい提案であると評価されました。

*その後、2023年度中のオープンを目指して、市と事業者で新型コロナウイルスに対応した施設設計等協議を重ねていたところですが、市の政策変更により、コンベンション施設とホテルについて計画見直しに向けた調整をおこなっています。

QURUWAプロジェクト-2

桜城橋の完成とP-PFI事業者決定

桜城橋の完成

2013年度に都市計画の専門家、建築家、地元市民代表などの方々から提案された、(仮称)乙川人道橋。一級河川乙川に架かる公園橋であり乙川河川緑地の公園・人道橋として「桜城橋」が2020年3月22日に完成しました。単に人が通過するだけの橋ではなく、広場・イベント空間などとしても活用できる橋として整備されました。

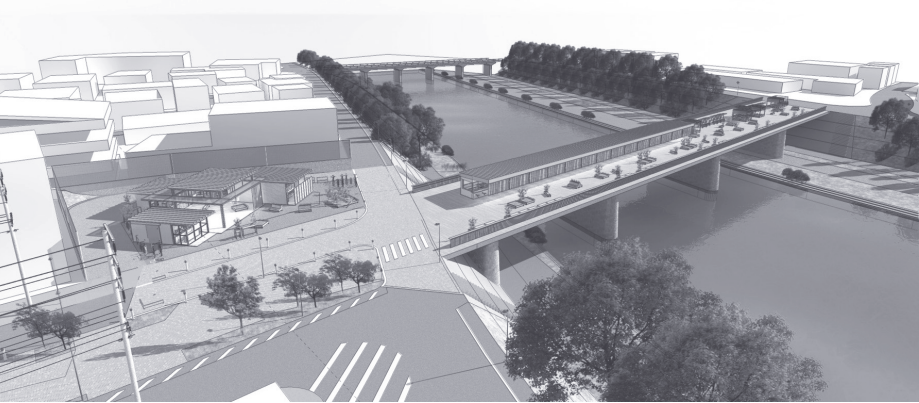
この新しく生まれた橋の名前「桜城橋」は、2018年8月から10月まで公募で集まった4,000件を超える中から、市内の中学生に選考協力をしてもらい5案ずつに絞られ、同年12月から2019年2月までおこなわれた投票にて決定したものです。「桜の名所である岡崎城を『桜の城』と例え、新しい橋から見える」ということで名付けられました。なお、同じく公募されたこの「桜城橋」から籠田公園までの「通りの愛称」は、「天下の道」が選ばれています。「桜城橋」は幅19メートル(有効16メートル)、長さ121.5メートルで、広さが約2,000平方メートル。床板や手すりは岡崎市の額田地区産ヒノキで装飾され、木のぬくもりを感じられる橋です。開通した3月22日は新型コロナウイルスの影響が見られたものの、多くの方々が「渡り初め」をおこないました。

Park-PFIによる中央緑道等(桜城橋橋上広場と橋詰広場)整備運営事業

そんな桜城橋橋上広場と橋詰広場に、民設民営による公募対象公園施設(カフェやレストランなど)と特定公園施設(トイレや休憩施設など)を設置する事業者の募集選定について、2020年2月25日に実施した岡崎市QURUWAプロジェクト(中央緑道等(桜城橋橋上広場と橋詰広場)整備運営事業)公募設置等予定者選定委員会の審査結果を受け、公募設置等予定者を選定しました。



橋詰広場の活用イメージ | 画像は提案時のイメージです



橋詰広場と橋上の活用イメージ | 画像は提案時のイメージです

公募設置等予定者

- 三菱地所/三河家守舎/サンモク工業/オープン・エー共同企業体
- ・三菱地所株式会社
 - ・株式会社三河家守舎
 - ・サンモク工業株式会社
 - ・株式会社オープン・エー

なお、Park-PFIとは、2017年の都市公園法改正により創設された、飲食店、売店等の公園利用者の利便の向上に資する公募対象公園施設の設置と、当該施設から生じる収益を活用してその周辺の園路、広場等の一般の公園利用者が利用できる特定公園施設の整備・改修等を一体的におこなう者を、公募により選定する「公募設置管理制度」のこと。このプロジェクトは、都市公園法第5条の2の規定に基づく公募設置管理制度を活用し、桜城橋橋上広場(乙川河川緑地の一部)と橋詰広場(中央緑道の一部)という二つの異なる都市公園の整備運営をひとつの募集でおこなおうというものです。二つの異なる都市公園をひとつの募集で整備運営することにより、その一体的な効果を発揮することが期待され、かつ、

認定計画提出者が指定管理者としても管理運営していくというスキームをとっており、公募設置管理制度の中でもあまり例のない事業となっています。今回、複雑な事業スキームかつ敷地条件の制約が多いなかで、橋上での建築や「中央緑道」との一体性等、難解な事業計画提案だったと言えます。選ばれた三菱地所/三河家守舎/サンモク工業/オープン・エー共同企業体の提案は、QURUWA戦略をふまえ、事業地の魅力向上が乙川リバーフロント地区の活性化や回遊性に波及する事業である点、2019年7月にオープンした籠田公園、2021年2月現在工事中の中央緑道との連続性を意識した配置計画に配慮した点などQURUWA全体への波及効果を意識した提案として優れたものであったことから、公民連携で進めるまちづくりのパートナーとして、最もふさわしい提案であると評価されました。

2022年4月のオープンを目指して、プロジェクトが進んでいきます。

*新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりオープン時期は調整中

外観イメージ | 画像は提案時のイメージです

QURUWAプロジェクト-3

東岡崎駅周辺 および北東街区 有効活用事業

東岡崎駅周辺では、景観等に配慮しつつ、橋上駅舎、自由通路の設置、駅前広場の整備などを総合的に実施し、本市の玄関口にふさわしい、安全でだれもが使いやすい、にぎわいの交流拠点づくりをめざしています。

岡崎市の都市核に位置し、都市機能の一端を担うべき名鉄東岡崎駅の北口駅前広場は、1日の乗降客約39,000人(年間約1,400万人)が利用する駅でありながら、非常に狭く、タクシー、一般車、バス等の交通が輻輳し混雑しています。このような状況を踏まえ、交通結節点整備として駅東側拡張用地の「東岡崎駅前広場」に一般車乗降場を、駅北東側



オトリバーサイドテラス



明大寺交通広場

拡張用地の「明大寺交通広場」にタクシー待機場や企業・観光バス乗降場などを整備して機能を分散させるとともに、東改札口から乙川河川緑地へとつながるペDESTリアンデッキを整備することにより駅前の混雑解消を図りました。

なお、駅舎や南北自由通路、駅ビル、バスターミナルを有する「東岡崎交通広場」は2期計画として、令和2年以降の着手を予定しています。

そのほか、北東街区有効活用事業として2019年11月2日に「オトリバーサイドテラス」がグランドオープン。「人と乙川を結ぶ「にぎわいと憩い」が共存し都市に活力が生まれる魅力ある空間の創出」を整備コンセプトとして、「将来的にも持続可能な魅力ある都市空間の創造」「回遊を促すにぎわい空間の創出」「乙川河川緑地との連携に配慮した憩いの空間の創出」を目標に、市有地に事業用定期借地権(賃借権)を設定して民間事業者に土地を貸付け、民間資本による施設建設・管理運営をおこなってもらう公民連携事業です。

河川緑地などの絶好のロケーションを活かし



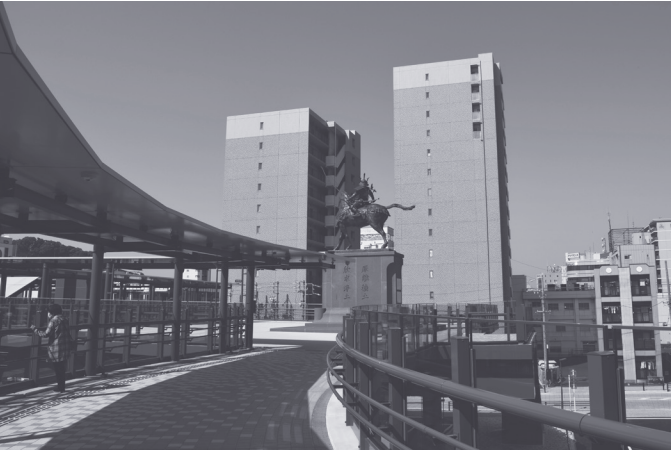
家康公ひろば

た地元岡崎や名古屋圏発祥のレストランやカフェ、フィットネススタジオやコワーキングスペース、保育所などの日常使いに便利なサービス、観光にも出張にも便利な都市型ホテルや、約1,600台を収容する駐輪場など、暮らしを豊かにしてくれる複合施設の整備が実現しました。

また、グランドオープンに合わせてペDESTリアンデッキ上の家康公ひろばでは、岡崎の新しいシンボルとなる全高約9.5m(像は約5.3m、台座は約4.2m。製作者は神戸峰男氏)の若き日の徳川家康公の騎馬像がお披露目されました。



東岡崎駅前広場



東岡崎駅ペDESTリアンデッキ

QURUWAプロジェクト-4

おとがワ! ンダーランド

今期よりおとがワ!活用実行委員会の自立を目指し、週末の日常的なプログラムと合わせて自主企画イベントを期間中に4件実施しました。「使う場」としての乙川から、乙川そのものの価値を体験できる機会や、かわまちづくりへの新規参入を増やすなど、一定の成果を生み出すことができました。

おとがワ!活用実行委員会の 自主事業

おとがワ!ンダーランド
OPENING EVENT「川びらき」

日時:2019年4月29日[月・祝] 8:30-21:00
来場者:約1,500人
実施プログラム数:10(ひとつは曇天のため中止)

おとがワ!ンダーランド
SUMMER EVENT「川あそび」

日時:2019年8月12日[月・祝] 16:00-21:00
来場者:約500人
実施プログラム数:10

おとがワ!ンダーランド
AUTUMN EVENT「川ぐらし」

日時:2019年11月9日[土] 12:00-20:00
来場者:約500人
実施プログラム数:16

おとがワ!ンダーランド
Let it Camp

日時:1stシーズン|7月13日-11月9日(うち13日間)
2ndシーズン|12月7日-1月25日(うち6日間)
来場者:584人

QURUWAプロジェクト-4

岡崎泰平の祈り

日時:2019年11月23日[土]17:00-19:00
会場:乙川、殿橋から潜水橋周辺
主催:岡崎 泰平の祈り実行委員会
来場者:約40,000人
*2018年約35,000人
*2017年約28,000人
*2016年約11,000人(午前中雨天)
*2015年約20,000人
放流総数:約30,000個

かわまちづくりの情報発信

[1]おとがワ!ンダーランド
ANNUAL REPORT -OTONOTO-
おとがワ!ンダーランド3年目の取り組みの様子をまとめた年次報告書。未来の乙川がどういう場所であって欲しいか、取り組み結果や、得られた気づきを言語化しながら、進むべき未来に向き合うレポート冊子1000冊を発行しました。

[2]おとがワ!ンダーランド-マンスリーチャシ-
おとがワ!ンダーランド内でおこなわれる公



川びらき | HANDMADE SELECT MARKET



川あそび | 夏の夜を泳ぐ金魚花火



Let it Camp



川あそび | 観光船: SUP. アクアボール体験



川ぐらし | 学びの教室



ANNUAL REPORT
OTONOTO



マンスリーチャシ

募プログラムを紹介する月次チャシ。6-11月の6ヶ月間に発行しました。表面ではその時々にかかる乙川での日常的な風景を写真で伝え、裏面で各月のプログラムを紹介。毎月1,500-2,000枚を発行しました。

[3]おとがワ!ンダーランドウェブサイト
-otogawa-
おとがワ!ンダーランドのウェブサイトを更新しました。テーマは「毎日訪れたい乙川へ」です。
otogawonderland.jp

る「乙川ナイトマーケット」、その他「イェヤスコウイルミネーション2019」「岡崎グルメフェス」「龍城神社、菅生神社にて限定御朱印や限定絵馬、お守りなど頒布」を実施されました。



この記事内写真提供:おとがワ!実行委員会

QURUWAプロジェクト-5 籠田公園 リニューアル

籠田公園(KAGODA PARK)は1958(昭和33)年に整備され、地域の人の憩いの場としてだけでなく、イベントも多く開催され、多くの人達に親しまれてきた公園です。籠田公園は本市が進めているQURUWA戦略の一つのプロジェクトとして2018年度から工事を開始し、「つどい・つながり・つづく」をコンセプトに暮らしの質の向上やエリアの価値を高めるための場所として再整備され、2019年7月にリニューアルオープンしました。

2016年7月に設計者として有限会社オンサイト計画設計事務所が選ばれました。選定後、設計者含むデザインチームと市民のみなさんがワークショップ形式で話し合う会「QURUWA FUTURE VISION」が同年10月から12月にかけて4回実施されました。2018年度には地域住民の方々、どんな使

い方ができるかのワークショップが3回開かれ、引き続き、2019年度には都市公園法の協議会設立に向けた準備会が3回開催されました。

新しい籠田公園のコンセプトは「つどい、つながり、つづく」場所

1:昔も今もいろんな立場の人々が「つどい」場所
遊具や噴水、勉強や会議など様々な目的で市民が訪れ、イベントだけに頼らずに日常的に市民に使われる場所として、また一人でも大勢でも気持ちよく居られる場所として人々が集うよう計画された籠田公園は地元や市内だけでなく、市外から訪れる人を迎え入れる場所となります。

2:様々な世代の人が一緒にいることで「つながり」が生まれる場所

子育て中のお母さん、小中高生、サラリーマン、近所のお爺ちゃんお婆ちゃん、そして訪れる観客らがちょうど良い距離感で一緒に過ごせる場所をつくりました。ここで過ごす人たちの姿が、訪れる人にとっての「岡崎の顔」となります。

3:未来へまちが「つづく」きっかけになる場所

地域の人や岡崎市民、市外からの観光客など様々な人がこの場所に集い、「人とモノ」ではなく「人と人」が繋がって楽しみ、喜び、知り、考え、地域の問題も解決することで、歴史があるこのまちがこれからも未来へつづくきっかけが生まれるよう計画されました。

籠田公園での設計上の工夫

A:旧東海道に面した「まちの縁側」空間

多くの屋根と木立に囲まれ、雨の日でも晴れの日でも気持ちよく過ごせるこの場所は、まちの延長として様々な市民活動を受け入れる「まちの縁側」となります。

連尺通や二七市通りと連携することで旧東海道沿いの軒先き空間として賑わいを連続させます。

B:「芝生の広場」=「市民活動」=「公園のシンボル」

現在までに市民の手で大切に管理されてきた芝生広場は、リニューアルしても引き続き籠田公園のシンボルとなり、ここで楽しみ集う市民の姿こそが新しい「まちの顔」となります。

北側に配置される芝生のマウンド(築山)は乙川対岸の丘陵地まで見渡すことができ、

もちろん寝転んだりすべって遊ぶこともできます。

C:芝生広場と対で活きる「緑陰の広場」

元々ある木立を残しながら、四季を感じられる植物を新たに追加して落ち着きのある緑陰空間をつくりました。

高木の下には低木植栽を植えることで木々や生き物にとって良好な環境をつくり、都市で暮らす人々にとっても小さな自然の気づきがある場所を目指します。(木々、野鳥と市民が共存できる場所)

D:中央緑道から公園へのエントランス広場

戦後復興のシンボル(戦災復興の碑)を継承しています。

イベント時の車の乗り入れや、祭りの際の桟敷席など多様な使い方ができるように舗装された広場としています。

リニューアル以降は清掃活動、図書館リサイクルバザー、ジャズライブがおこなわれるのみならず、日常的にキッチンカーなどが登場し、籠田公園における新たな日常風景をつくっています。籠田公園のリニューアルをきっかけに、籠田公



キッチンカー出店のようす

園周辺の学区の枠を飛び越えた、7つの町内会を中心として、さらに広い町内会がまとまった7町・広域連合会が地域主体で発足しました。これをきっかけに、地域の課題を自ら解決する

ため、籠田公園で約30年ぶりに盆踊りを開催したり、籠田公園周辺への新規出店支援やまちの見守り活動など、暮らしの質の向上を図るアクションをおこしています。



ゴムチップでできたマウンドで遊ぶようす



芝生マウンドで転がって遊ぶようす

籠田公園リニューアル後に生まれた民間の動き

令和元年度 籠田公園オープニング式典

日時：2019年7月28日[日] | 主催：籠田公園周辺七町連合会



自治会主催の夏祭り(盆踊り)

日時：2019年8月10日[土]
主催：籠田公園夏祭り実行委員会



籠fes, We LOVE 籠田

日時：2020年2月11日[火] | 主催：梅園小学校6年3組
内容：地元小学生主催の自主イベント



MUSIC FESTA atNewKagodaPark

日時：2019年8月4日[日] | 主催：未来城下町連合 | 内容：地元団体主催の音楽イベント



「Park Trade Association Bazaar」vol.1

日時：2019年11月10日[日] | 主催：パークトレードアソシエーション
内容：アパレル、飲食、グラフィックデザイン、アクセサリーなどを扱うマーケット



各種キッチンカー出店



QURUWAプロジェクト-7 道路再構築事業 (康生通り)

時期：2019年10月8日[火]～11月8日[金]
場所：康生通り
主催：株式会社まちづくり岡崎

「道のリビング」をテーマに、街と一般利用者を日常的に繋ぐ通りの活用の社会実験。一般利用者也商店主とともに集まって混ざり合い、コミュニケーションをとれる居場所＝「道のリビング」を道路空間で実現するための活用方法を検討しました。

2018年度「グッとくるわ社会実験」では、まち（康生通り）の日常の活性化を目標に商業（店舗・軒先）と空き店舗、公民の空地を含めた道路空間活用を実施し、歩いて見て楽しいまち「将来の康生通り」を描いてみる実験をしました。1週間の社会実験期間中では、康生通りの沿道店舗だけでなく、規制した歩道空間にキッチンカーや小物雑貨販売の外部出店者を、公募で誘致し、沿道商店と合わせて期間中92店が出店しました。人の往来や店同士のコラボレーションなど、波及効果が見られました。また、歩道空間、来街者用の休憩スペース（ベンチ・テーブル）を設置することで人が滞留し、まちの滞在時間の延長、店舗間の回遊動線の一躍を担えました。

2019年度の「グッとくるわ康生社会実験」では、軒先活用や空地の有効活用の検証内容をブラッシュアップするとともに、道路空間の中でもメインの活用対象となる「歩道」「車道」のうち、前年度の課題となっていた車道の実験について、岡崎市から都市再生推進法人の指定を受けたことで実施を可能としました。また、実験期間も2018年の1週間から1.5ヶ月にのばし、「日常化」へのアプローチを強めています。その中で「車線規制・軒先利用・構造物の常設化（パークレット）」の3点について一歩踏み込んだ形で沿道店舗への反応と影響を探りました。康生通りの車道を規制し、通りに全9カ所、大小のパークレットを設置し、車道の規制と拡張した歩道空間の有効活用を検証しました。パークレットのなかではオセロなどおもちゃで遊ぶ小学生や、待ち合わせ、読書、飲食など、様々な利用風景がみられ、歩道では沿道の店舗が普段は置くことができない看板や商品の

体験コーナーなどが設置されました。

実験内容 「より日常化を想定した 道路空間活用の検証」

車道……車道規制

- ①：約1.5ヶ月間、康生通りの車線を一部規制。自動車の交通に危険がなくスムーズにおこなわれるのかを検証しました。
- ②：車線を規制した場合の、沿道店舗への影響や反応を探りました。

歩道・空地……空間活用

「街中への集客→街中への滞留→沿道店舗への波及」という流れを通りの中で一体的につくりだすことを目的に、「道のリビング」の想定元、以下の3つの機能で通りを構成し、それぞれ空間活用をおこないました。

- ①：[空地]キッチンカー村（まち中の集客拠点）キッチンカー、テント出店 *交番横空地
- ②：[歩道]パークレット（滞留スペース）休憩 & 情報スペース、Wi-fiや遊び等備品の設置 *車道側歩道
- ③：[歩道]軒先活用（にじみ出しによる波及）体験ブース、外での売り出し、接客席、青空カフェ等 *店舗側歩道

検証結果

車道について

[交通車両]車線は規制しても、交通量自体に大きな変化がないことが判明しましたが、バス停の位置や信号の連動等についての検討が必要であることがわかりました。

[沿道店舗]車線規制や2車線化は、お客様の来店阻害など悪影響が出るのではないかと不安が見られました。

パークレットについて

[沿道店舗]パークレットのような大型設置物は、お店が見えなくなる、荷さばきがしづらくなる、お店への来店を阻害するなど、否定的な意見が多くありました。

[一般利用者]来街するという点で、休憩スペースや情報が分かる場所があると非常に良いと好評でした。

軒先について

[沿道店舗]1.5ヶ月という長期間で約3割の店舗が軒先約1mの道路空間を活用しました。イベントではなく日常的に利用するという視点で、軒先1mの歩道空間を有料で活用したいという意見は1件、金額によるという意見は5件と、条件次第で活用を望む声

がありました。

キッチンカー村について

[出店者]空地活用の2年目は、テント付き休憩スペースを常設形に変更。出店カレンダーをつくりWEBからの申込みをシステム化するなど、運営労力を最低限に抑えたかたちで実施しました。出店者からは、街の店舗や一般利用者との出会いやふれあいに満足する声が多く、今後も引き続き出店を希望する傾向が多く見られました。



車道の一部をパークレット化



空地を活用しキッチンカーを誘致



軒先で青果を販売するようす



通りで景観を統一して一体感を演出

この記事内写真提供：株式会社まちづくり岡崎

QURUWAプロジェクト-7 道路再構築事業 (連尺通り)

時期:2019年9月-10月
場所:連尺通り
主催:株式会社三河家守舎

2018年度に実施した連尺通3丁目での社会実験の成果と課題を踏まえて、2019年度は、連尺通1丁目および2丁目を新たな範囲として拡張した形で実施しました。沿道住民(民間事業者/居住者)の意識啓発と機運醸成を図るため、道路再構築の効果や影響をイメージし、歩道空間や軒下スペースの利活用のアイデアやストリートデザインの将来イメージを議論しました。

また、具体の社会実験を一定期間おこない、沿道住民や沿道事業者にとって道路空間が「自ら活用するもの」、「他者に貸し出すもの」、「オープンスペースとして開放するもの」のパターン化をおこない、通り全体のストリートマネジメントの最適解を導き出しつつ、民間活動が持続する仕組みを検討しました。そして、活動内容や実施状況、実験結果、将来の展望などを地域住民や来街者に情報展開していきました。

検証項目

- ・歩道空間の貸し出しパターンの検討
- ・歩道利活用内容のバリエーションの検証
- ・沿道住民の意識変化、行動変化の検証
- ・隣接した建物、駐車場との一体活用や有効活用の検証
- ・道路空間の管理体制、組織体制の検証
- ・事業スキームの検証
- ・ストリートデザインの素案(イメージ、パターン)
- ・情報発信にまつわる課題検討や検証

実験から日常化への変化と ストリートデザインへの関心増強

沿道の人それぞれと道路活用の相談をしながら、それぞれの生活スタイルに合わせた活用と管理を伴う什器を提供。沿道の人への管理依頼を通じて、断続的や単発的であった道路



歩道と駐車場を一体的に活用



軒先で衣料品を販売するようす

活用が習慣化され、さらに当事者意識を持ってもらうことに繋がりました。看板と机椅子、おもちゃ類の出し入れをしてくれるようになった方がいたり、夜間照明の管理、動く街路樹の管理補助をする人などがその例として挙げられます。

こうした社会実験の実施と連動させた情報発信の観点から、ウェブサイト「連と尺」を新たに制作。連尺通りにある店舗の商品を紹介するというもので、その商品をあしらったフラッグを沿道に掲出する取り組みも並行して実施。籠

田公園やりぶらなどで、QRコードを印刷したバルーンを浮かべ、ウェブサイトへ導入できるようにしました。連尺通りで何かがおこなわれている雰囲気を与えたことで「気になる通り」という印象を高めたり、足を運んでもらうきっかけをつくることができました。

また、地域住民が参加するストリートフリーマーケットイベント「連と尺蚤の市」を実施したことにより、外の人に関わりやすいきっかけが生まれ、沿道の人へも活用をうながすきっかけになりました。

プロジェクトレポート

QURUWA LIFE HACK

日時:2019年11月13日[水] 16:30-18:30
場所:Camping Office Osoto OKAZAKI

主な登壇者

清水義次 | Yoshitsugu Shimizu
アフタヌーンソサエティ

西村浩 | Hiroshi Nishimura
ワークヴィジョンズ

原田祐馬 | Yuma Harada
UMA/design farm

榊原充大 | Mitsuhiro Sakakibara
建築家/リサーチャー/株式会社都社有機能計画室

長谷川伸介 | Shinsuke Hasegawa
株式会社まちづくり岡崎

山田高広 | Takahiro Yamada
株式会社三河家守舎

鈴木昌幸 | Masayuki Suzuki
岡崎市企画課

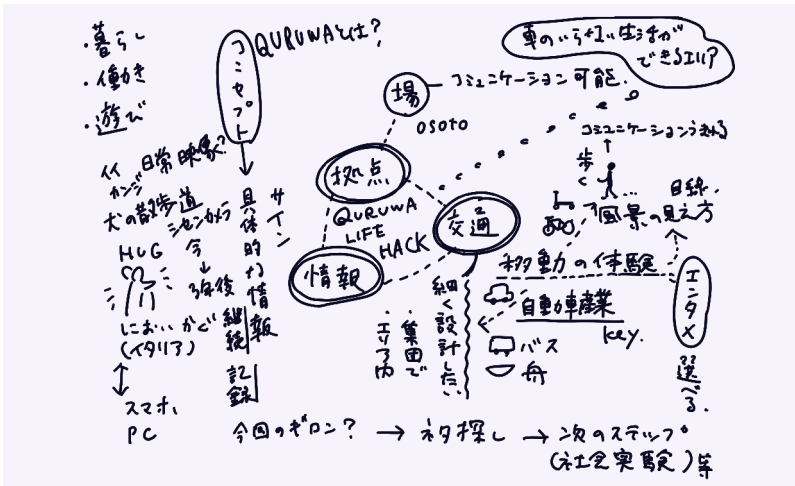
瀧浪勝俊 | Katsutoshi Takinami
岡崎市都市施設課

QURUWA 戦略において現在進めている拠点プロジェクトの進捗を踏まえ、QURUWA の回遊を実現するために、関連の深い3つのテーマ「拠点事業」「交通計画」「情報発信」について、各分野の専門家を交え官民双方が、実現性・事業性を考慮しながら一体的に議論するための機会がQURUWA LIFE HACKです。

スケッチドキュメンテーションと呼ばれる手法
 を利用し、大角真子氏によってリアルタイムで
 議論の内容が整理されながら、具体的なア
 クションプラン案(術)構築が検討されました。
 QURUWAに現在関わっている民間事業者
 や、これからQURUWAに関わりたい民間事
 業者をオブザーバーに、オンラインアンケート
 サービスを活用しながら、随時質疑を受け付
 けながら議論が進んでいきました。



当日のようす



当日の議論を
まとめた
グラフィック
レコーディング

3つのテーマのうち拠点事業については岡崎市担当者から今後3年の拠点形成について、そしてスマートシティ構想について話題提供がなされました。その後「交通計画」についてワークビジョンズ西村氏より話題提供。「歩いて楽しく、車でも動きやすい。いろんな移動手段があってもいいのではないか。」というテーマが語られました。そして最後に「情報発信」について、都市機能計画室榊原氏より話題提供がありました。「QRUWAについての「説明」はあるものの、QRUWAと私がどう関わりうるのかを伝えていく必要があるのでは」という問題提起がなされました。

後半のクロストークでは、QURUWAロゴの作成や籠田公園等のサイン計画にも携わるUMA/design farm原田氏、そしてQURUWA

重要なキーワード・話題 [抜粋]

- ・移動はエンターテインメント。移動の多様性は都市の豊かさを示す指標。
- ・移動手段を徒歩にシフトすることで、コミュニケーションが生まれ、風景の見え方が変わり、濃厚な体験が可能となる。
- ・新たな移動手段をどう習慣づけさせるかが課題。
- ・車の利用を否定するのではなく、エリアによって移動手段を分けることが大事。
- ・誰のための情報発信なのかを意識するべき。
- ・暮らしが多拠点化する中で、そこにしかないものがある場所が選ばれていく。
- ・公共と民間の空間が境目なく見えるまちは居心地が良い。
- ・オープンカフェは民間型のパブリックスペース(公共空間)。
- ・官民連携だけでなく、官官連携もすすめるべき。
- ・各店舗が、個別におこなっている施設の維持管理をエリア全体で管理することで、費用のコストダウンに繋がり、浮いた費用でエリアマネジメントの運営費を捻出することも可能。
- ・健康的に働くためには、快適なオフィス空間が必要。
- ・まちでチャレンジする民間事業者を行政は規制緩和等により応援する関係が必要。
- ・岡崎市に投資をしてほしい事業者に向けたピンポイントな戦略的情報発信が求められる。
- ・QRUWAと地場企業を繋いでいくことが求められる。

プロジェクトレポート クリエイティブ 人材育成 支援業務「INC」

時期：2019年11月～2020年3月
フェーズ1 | INPUT/インプット：
2019年11月23日、12月8日、12月15日、
2020年1月18日
フェーズ2 | OUTPUT/アウトプット：
2020年1月25日、2月15日、3月8日
フェーズ3 | PRESENTATION/プレゼンテーション：
2020年3月20日
*フェーズ3は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止

プロジェクトメンバー
原田祐馬 | Yuma Harada
UMA/design farm
榊原充大 | Mitsuhiko Sakakibara
建築家/リサーチャー/株式会社都市機能計画室
山田高広 | Takahiro Yamada
株式会社三河家守舎/森、道、市場
武部敬俊 | Takatoshi Takebe
LIVERARY
山田卓哉 | Takuya Yamada
大ナゴヤ大学
主催：株式会社都市機能計画室

クリエイターが「これからの〇〇」を考えるプロジェクト「INC」。今回の「〇〇」は、愛知県岡崎市にあるローカル・コンビニ「TAC-MATE」です。多彩なゲストを迎える「インプット」と、「TAC-MATE」を新たなメディアとしてとらえる「アウトプット」の2つのフェーズからなります。プロジェクトのためのアイデアだけでも、それを実現するスキルだけでなく、プロジェクトの筋道をつくる「クリエイティブ・ディレクション」の鍛錬を重視するところが特徴です。東海地域から参加者を募集し、岡崎在住者・岡崎外東海圏在住者、クリエイティブな仕事に携わる方、企業に所属しながらクリエイションをおこなっている方など、多種多様な参加希望があり、計14名を参加クリエイターとして迎えることとなりました。

インプット
2019年11月23日[土]
園田崇匡氏
[大衆食堂スタンド そのだ/台風飯店etc]
園田氏が手掛けられた飲食店にまつわるアイデアから運営までひとつひとつ語られていきました。ワークでは、アイデアの生み出し方につ

いてのレクチャーとワークがおこなわれました。
2019年12月8日[日]
原田祐馬氏
[UMA/design farm]
「INC」プロジェクト創設メンバーでもある原田氏にとってのデザインについてのレクチャーと、主要なプロジェクトにおけるディレクションの考え方が丁寧に語られました。ワークでは、先入観から自由になるためのレッスンに実際に手を動かしながら取り組みました。

2019年12月15日[日]
野村由芽氏・竹中万季氏
[She is/CINRA.NET]
オンラインマガジン「She is」の編集を手掛ける二人にとってのクリエイティブディレクションについて語られました。ワークでは、これまでに出版されたアイデアに対する2人からのレビューやディスカッションがなされました。

2020年1月18日[土]
山道拓人氏
[株式会社ツバメアーキテクト代表取締役]
ツバメアーキテクトにおいて設計以外の事業をどのように提案し、プロジェクトをクリエイティブに進めていくのかがロジカルに語られました。ワークでは、これまでに出版されたアイデアをブラッシュアップし、参加者によるプレゼンテーションがなされました。

アウトプット
「インプット」を経てフェーズ2の1回目。決まったスケジュールではなく自由に話したりアイデアを出し合ったりする機会が欲しいという参加者からの意見を受け、プレゼンテーションに向けてのチームづくりとアイデアのブラッシュアップを実施。フェーズ2の2回目では、ゲストとして編集者多田智美氏にお越しいただき、アイデアのまとめ方を、プレゼンテーションと企画書のつくり方の違いを意識しながらレクチャーいただきました。フェーズ2の3回目はプレゼンテーションのリハーサル。レビューも含めて各チーム時間をかけながら提案内容を調整していったが、残念ながら結果的に3月20日のプレゼンテーションは開催不可。企画書、およびウェブサイトでの提案公開へと舵を切り、そのための詰め作業を実施中。成果として、「主役はまちで暮らす人。まちの魅力に出会えるカード」がキャッチコピーとなる「QURUWA! アド街ツプス」、
「文化体験蓄積型コンビニエンスストア」をうたう「The Archive Club」など7つのプロジェクトが提案されまし

た。「The Archive Club」を提案したチームの岡崎在住のメンバーが実行にうつすため、TAC-MATEを独自に借り「DM710」としてコンビニ内ショップをオープンさせました。



インプット前半：ゲストによるトーク



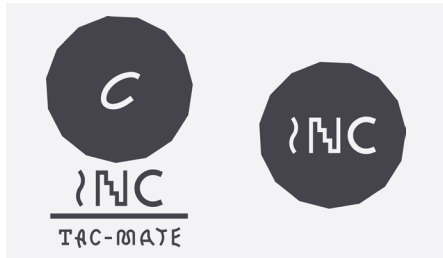
インプット後半：ゲストとのワーク



アウトプット期間のようす



ウェブサイトでの提案公開



INCロゴ

シンポジウム QURUWA 新章突入 あなたはどこで 何をする

毎年度実施している、QURUWAのまちづくりの恒例シンポジウムを2019年度も開催しました。同地区の整備が大詰めを迎え、QURUWAにおいてもまちの風景や過ごし方や人の流れが変わり、公民連携が進めるまちづくりの舞台も整って、民間ならではの視点、アイデアで魅力的な暮らしを描き、実現する新たな事業やプロジェクトを仕掛ける段階に突入することを受けて、これからのQURUWAへの関わり方について掘り下げました。

日時：2020年2月1日[土]14:00～16:30
場所：岡崎市福祉会館6階ホール
参加者：226名（そのほか関係者15名、託児利用児3名）

パネリスト
（乙川リバーフロント地区まちづくりデザインアドバイザー）
藤村龍至 | Ryuji Fujimura
コーディネーター/建築家/
東京藝術大学美術学部建築科准教授/RFA主宰
清水義次 | Yoshitsugu Shimizu
建築・都市・地域再生プロデューサー/
アファタム・サエティ代表/3331アー・千代田代表
西村浩 | Hiroshi Nishimura
建築家/クリエイティブディレクター/
株式会社ワークヴィジョンズ代表取締役/
オン・ザ・ルーフ株式会社代表取締役/
株式会社リノベーションパートナー
泉英明 | Hideaki Izumi
都市プランナー/有限会社ハートビートプラン代表取締役/
北浜水辺協議会理事
伊藤孝紀 | Takanori Itoh
建築家/名古屋工業大学大学院建築・デザイン分野准教授/
タイプ・エビー主宰



左から、伊藤孝紀氏、泉英明氏、西村浩氏、清水義次氏、藤村龍至氏

おとがわプロジェクトの5年間					
2015 H27	2016 H28	2017 H29	2018 H30	2019 R1	2020 R2
1.ビジョンを策定		公民連携 まちづくり 基本計画 「QURUWA新章」	籠田公園 仕組みづくり WS	籠田公園改修 北東街区 竣工	まちなか景観 ガイドライン
デザイン シャレット 乙川RFF地区 まちづくり 基本構想 まちづくり シンポジウム まちづくり ワークショップ 官民連携 調整会議発足 リノベーション スクール まちづくり 市民提案	2. 公共のプロジェクト		太陽の城跡地 橋詰広場 PFI事業者選定	民生通り 社会実験 民生通り 生活社会実験	エリアマネジ メント方針検討
	3. 民間の小さなプロジェクト		中央緑道等 基本設計業務 指名型プロボ	簡易型プロボ	
			中央緑道等 基本設計WS	4. 公民連携プロジェクト立ち上げ	
			社会実験 「おとがわ！ ンダーランド」		5. 新しい日常＝新章

QURUWAのまちづくりの「必勝デザインプロセス」(藤村氏資料より抜粋)

藤村 | 乙川リバーフロント地区というのは、第二次世界大戦後の戦災復興事業で整備された地区の2回目の再整備にあたります。これまでのプロセスを整理すると、2015年からの最初の2年間はまちづくりの方向性を議論して大きな「ビジョンを策定」する期間、その後まず「公共の大きなプロジェクト」の発注が始まり、並行して籠田公園周辺でリノベーションまちづくりが進められ、並行して殿橋などで社会実験がおこなわれるなど「民間の小さなプロジェクト」が始まりました。それらの経験を活かして太陽の城跡地や、桜城橋の橋詰広場の「公民連携プロジェクト」が立ち上がってきています。今回の「新章突入」は、これらの積み重ねのうえでこれから始まるであろう「新しい日常」を迎えるということです。

他のまちでよくあるプロセスは、最初に合意形

成に失敗してビジョンがうまく策定できず、公共プロジェクトが縦割り行政の中でバラバラに発注され、民間事業者がついてこず、公民連携プロジェクトも立ち上がらず、その結果きれいで使われない公共空間が整備されてしまうというものです。それを考えると岡崎でのこの6年間のプロセスは、とても理想的なプロセスだったと思います。なぜそのようなプロセスが辿れたのかといえ、ビジョンを策定する段階でデザインシャレットやまちづくり市民提案などでしっかり啓発して、公共のプロジェクトを発注する段階で市役所の内部に「官民連携調整会議」や「デザイン調整会議」をつくって、乙川河川緑地の利活用社会実験や連尺通りの生活社会実験をして、それを踏まえて公民連携事業として太陽の城跡地や桜城橋や橋詰広場の事業者選定もお

こなう、というように、5年間の中で専門家の知見も活かしながら徐々にやるべきことを積み重ねることができたからだと思います。その結果、籠田公園や中央緑道沿いに先行しているように、公共投資を追いかけられるようにして民間投資が誘発され、岡崎のまちなかに新しい日常風景が生まれ始めているのだと思います。

西村 | 私が関わる2017年ころには、岡崎のハード整備の形が見えてきていました。これからQURUWAのQというこの大きな舞台に、マグネットのように市民活動が張り付いてこない、ただきれいな公共空間ができた、ということになってしまうんです。実はここからがすごく大事で、いかに多くの事業者、あるいは利用者がQの中に集まってくるか、ということにチャレンジしていかなきゃいけないと思っています。僕の故郷は佐賀なんですけど、佐賀で10年ぐらい活動してきて、ようやく良い風景が生まれできました。河川と道路という公共空間があって、民地とこれらの公共空間の境界を敢えて曖昧にして、歩道や河川に人の活動がにじみ出てくるっていう状態を日常的につくろうという活動をしているわけです。まちなかにクリーク(川)があって、乙川のように遊びたおすと徐々にその沿川の価値が上がっていくわけです。川で遊んで、川の魅力が上がっていくと、川に面した不動産の魅力が高まっていくんです。やがて、その場所やエリアで何かをやりたい人が絶対に出てくる。だから先行してそうした動きを起こしていくエリアの空き地や建物を狙って利活用を誘導するというのがすごく大事だと思っています。事前にイメージを勝手に描いてくわけです。人の家であろうと関係なく「こうなったらいいよね」というイメージを描いていきます。



会場のようす

そうしてイメージを膨らませていくと、それでもエリアの価値が上がります。次に道路です。駐車場だけの延長約200mのエリアで10年間やってきましたが、最初に空地に芝生をはってコンテナを置いて、子どもたちやお母さんたちが集まるといいな、というイメージで取り組みを始めたんです。そうすると、やっぱり子育て世代が集まってきて、平日の昼間にはほとんど人が歩いていなかった通りがすごく明るい雰囲気になってきました。その変化の兆しをいち早く感じた事業者が、ラーメン屋さんとスポーツバーを建てたんです。これがまたマグネットになって、通り沿いの空き地はどんどん原っぱにしていこう!といったプロジェクトが起こったり、若い人が空き店舗に入ってお店をオープンしたりと連鎖的に動きが出てきました。これらのポイントは、延長200mの道路沿いに様々なことが一気に展開しはじめたことです。要は密度が大事です。Qの中を高密度で全部埋めようと思ったら、相当の事業者やプレーヤーが入ってくる必要がある。だから一度に全部のエリアを盛り上げようとする、なかなか難しいけれど、それが200mぐらいの小さなエリアを例えば数カ所、QURUWAの中で選んで、そこを集中的にやるとしたら、5人ほどのプレーヤーが集まれば、その200mはQの中でいい感じに変わっていくと思います。そして、そこに魅力を感じたプレーヤーたちがさらに「マグネット」されて、どんどん起業したり、活動を始めたりにしていきます。その循環をどうつくるかが、これからのQURUWAの勝負だと思っています。

泉 | やっぱり今から大切なのはコンテンツを持っている人です。コンテンツを持っている小さな事業者の方を巻き込むと、その後、その利用者、ユーザーが出てきます。



会場に設置した託児スペースのようす

ユーザーがパブリックスペースを面白い使い方をするとまったくまちのシーンが変わります。あとはコンテンツです。豊かな生活につながるようなコンテンツを持っている人がちゃんと事業としてそれを始めていくと大きくまちが変わります。まさにそういうコンテンツを増やしていこうというのが、「おとがワ!ンダーランド」の取り組みです。小さな事業者がちょっとずつ集まって、ちょっとずついい投資をしたらエリアの価値がどんどん変わっていくことを伝えたいです。大阪の北浜という所で川沿いのビルの川に面した部分を活用する「北浜テラス」という取り組みをしています。元々は「使われてない河川空間をどうしよう」と妄想していました。そして、オーナーに提案しに行きましたが、50軒のオーナーがいる中で、最初は3軒しか一緒にやろうという人はいませんでした。が、試しに1カ月限定でテラスをつくってレストランの運営をしてみたら非常によかったので、常設しようということになりました。このポイントは、最初3軒から小さく始めて、徐々にいい暮らしのシーンを広げていくということと、社会実験としてやることで、ちゃんと事業性をもって運営できるということをみんなに証明していくこと。最初3軒から始めて15軒にまなっています。北浜水辺協議会という協議会をつくって、そこが全てのデザインコントロールをして、継続的な組織も今立ち上がっています。最初は小さな動きでしたが、それが集まるとエリアが大きく変わっていくことを実感しています。

伊藤 | 私は今日、「観光」と「産業」という2つのキーワードに着目しながら、官民連携のハード整備につながっていく話をします。名古屋市の例ではありますが、名駅地区と栄地区を分けて考えるのではなく、両方の地区を繋げながら、既存の製造業だけではなく、何かプラスαになるような新たな産業を生み

出せないだろうか、またそれに準ずるような人材を誘致できないだろうか、そんな取り組みを2015年から始めています。最初はシンポジウムの開催や、海外の視察をおこないながら進めていました。2、3年して、実際にリーディングプロジェクトとして、名古屋の都心部に数多くある立体駐車場のひとつをリノベーションすることから始めました。駐車場がたくさんあると、やっぱりまちを歩いていて、あまり楽しくないんです。立体駐車場の一部分が美容院やカフェなどお店へ変わってくると、まちの中を歩きながら、楽しく感じられると思います。そこで、クリエイティブサロンと称して、クリエイティブに活躍する方々と交流する取り組みをおこないました。何をしたらクリエイティブ人材が集まってくるのかが分からなかったので、先ず20代から30代前半で起業をしている方々をお招きしました。愛知で起業した方の話で驚いたのは、20代なのに起業する仲間がもの凄く多い。自動車産業だけじゃなくて、アプリ等の開発をしながら活躍している人材が、東京に次いでこの愛知県に多いことを教えてもらいました。では、このような人材の心に触れるようなコンテンツとは何なのか。何か観光や産業と結び付くような仕掛けを、小さなことからでも検討してみるの、ひとつあるかもしれません。一方、人口15万三重県桑名市の事例として、2014年に市長がブランド都市化を宣言したことをきっかけに、まち全体のブランディングに取り組んでいます。まず、ブランドコンセプトをつくり、イベントから公共施設にも展開することを目指しました。一番のキラーコンテンツは「本物博覧会」といって、地域の本物力を集積することに努めました。地域の人たちが伝統産業や文化、芸能など情報発信しながら、互いに交流できる場をつくろうと思いました。市民が自分のやりたいことに取り組むことができ、スタートアップとして起業するなど多様なチャレンジを支援する仕組みをつくることで、結果的には産業や観光と結び付いてくるような、そんな仕掛けが岡崎にもできるといいと思います。

清水 | QURUWAの中で、大きな民間投資をしようとする方々が、いよいよ登場する段階に近付いたという感じがします。QURUWAの公共空間整備によってもたらさ



ポートランドのSouth Park

れる周辺への波及効果がすごく大きくなると思います。今後は、市民の方々がこのエリアにどう関わることが重要で。籠田公園の周辺で面白いコンテンツをつくり出すプレーヤーの方々の活躍でまちにどんどん小さいコンテンツがつくり出されています。この動きが基盤として絶対的に外せないと思います。こういう形のさらに大きい民間投資をどんどん起こしていってほしいです。そのときに今日、来られている方々にお願いがあります。できるだけエリア価値を高める賢い投資をしてください。クオリティーの低い投資はしてほしくありません。これが一番のお願いです。他のまちにないようなクオリティーの高い投資をするとQURUWAがさらに良くなります。例えば、QURUWAの整備が進むとともにマンションがますます建てやすくなりました。今は様々な土地がまだ遊休化している状況です。駐車場の用途にしか使っていない遊休地がQURUWA周辺に数多くあるため、マンション開発がこれからどんどん起こっていきます。その時に、できれば1階(路面階)の使い方は、岡崎のまちづくりを一生懸命やっている人たちに相談を持ちかけてほしいのです。そしてきちんと維持管理運営できる店舗を1階に入れること、際だって面白いコンテンツを路面階に入れることが必要十分条件になります。それからもうひとつお願いがあります。岡崎の中心のQURUWAエリアを良くしようとするときに、岡崎の周囲とつなげて、地域で経済を回すという考え方をベースに持ってほしいと思います。例えば、森林資源を活かした暮らし方は、中部ヨーロッパでこの20年間で大きく発展し、化石燃料をほとんど使わずに快適で健康な暮らし方ができるようになっています。

ここで都市観光が盛んなまち、アメリカのオレ

ゴン州ポートランドの話をしたいと思います。ポートランドは、まちの暮らしを楽しむことが観光の主目的になっています。岡崎では岡崎城や歴史性の高い遺産もたくさんありますが、それを捨てると言っている訳ではありません。QURUWAを中心に新しい都市観光を考える、この姿勢がこれからは大事だと思います。ポートランドでの都市の暮らし方も岡崎で目指してほしい姿です。ウィラメット川の河畔の公園では健康な生活を送ることを目的とした日常的な使い方がされています。お子さんとお母さんの姿も非常に多いです。「20-Minute Neighborhoods(20分圏ネイバーフッド)」を掲げ、住居とまちの中心部にある職場まで20分で行けるまちとしています。次に、ポートランドには中央緑道にちょうどそっくりの緑道公園South Parkという細長い公園があります。これが特定の曜日には、たくさんの人出になります。ここではオーガニックマーケットが毎週開催され(上画像)。市内中心部の5カ所くらいで毎週開かれています。QURUWAの中で曜日毎に場所を変え、道路や公園や河川敷が使われ、周辺のおいしいオーガニックな野菜等がたくさん提供されるマーケットが開かれているのもいいかもしれません。South Parkのすぐ脇のスペースでは、普通の街道を閉鎖し楽団による音楽演奏が路上でおこなわれ、子供たちがたくさん集まっています。りぶらの周辺あたりで日常的にこんなことが起こるといいなと思います。それからQURUWA内の交通も重要になってきました。例えば、ポートランドでは多様な交通手段があります。中心部エリアを無料で乗れるトラム(路面電車)が走り、バスの本数も非常に多いです。自転車も盛んで、警察官まで自転車で警備をおこなっています。

(以上、発言を抜粋)

関連プロジェクト

QURUWA
講演会&
意見交換会
「そととつながる
図書館」

日時：2020年2月25日[火]14:30～16:30
場所：岡崎市図書館交流プラザ・りぶら
会議室 103

りぶら内外における活動を促進するため、QURUWA 戦略の総合プロデュースを務める清水義次氏が携わり、たびたび事例にも上げられる岩手県のおガール紫波における紫波町図書館の主任司書である手塚美希氏をゲストに招き、QURUWA 講演会 & 意見交換会「そととつながる図書館」をりぶら内の関係者を対象に開催しました。

最初に清水氏より紫波町図書館と手塚氏の紹介がなされます。おガールと周囲のまちに繋がりが生まれ、高齢化率が下がり、過疎のまちで待機児童が発生するという「事件」が起きているそう。

関連プロジェクト

QURUWA 菜園

時期：2019年9月5日[木]～2020年3月末
実施：14回
参加人数：238名(平均17名/回)
従事人数：116名(平均8.3人/回)
総来場者数：446人(平均31.8人/回)
*参加者、従事者、見学者、関係者の合計

岡崎まち育てセンター・りた(都市再生推進法人)、おかざき農遊会、市民有志からなる、「QURUWA 菜園inりぶら実行委員会」によって、ストリート広場南西の砂地部分でおこなわれた、農作物栽培用のプランタと青空教室用のテーブル・ベンチを仮設置した参加型農園の取り組みです。



手塚さんによる公演のようす

次いで手塚氏からは「『知りたい』『学びたい』『遊びたい』を支援する図書館」という運営方針と、官、民、子、団体、地域すべてが垣根なくつながることができるのが図書館という考え方が紹介されます。運営する中で気づいたことの一例として、「来館してもらうだけでなく、こちらが出向くサービスを考える」ことが重要であると語ります。産地直売所、JAいわて、農林課、農林公社と連携して企画展示をおこなったり、マルシェと連携して野菜の販売とレシピ本とセットにしたり、多様な活動を図書館をきっかけにして実施されています。もちろん農業従事者との連携のみならず、出版社、美術館、そして醸造所などの地元民間事業者などとの手を組みながら、図書館からまちを変えていく取り組みをおこなっています。

質疑応答や意見交換では、りぶら側司書の一部からはこれまでにない図書館像とのギャップにやや戸惑うような質問がなされる場面も

「農」というテーマでQURUWAにおける「暮らしの質の向上」を体现するプロジェクトとしてプロモーションおよび協働促進をおこなった結果、①まちづくり・商店街組織(まちづくり岡崎、東康生レディース会)、②NPO(コネクトスポット)、③民間事業者(Snowpeak Business Solutions)、④教育機関(愛知学泉大学)とのコンテンツ連携が実現しました。

QURUWAの集客拠点であるりぶらの「中から外へのにじみ出し(コンテンツへの誘因効果)」の一定の効果を検証しました。広報手段として効果が高かったのは「ロコミ(32%)」ですが、「チラシ(25%)」(QURUWAボード等で配架)の効果や館内放送実施時の参加者増(17.8%、25.0%)、通りすがりの参加も見られました。ターゲットに適したアプローチすることで、にじ



あったが、手塚さんはひとつひとつ丁寧に答え、紫波においてもそうした声に実直に向き合ってきた横顔を見せるようでもありました。「ヒトとヒトとのつながりはAIではできないこと。図書館こそ人と人のつながりに貢献してほしい。」という指摘がなされておわかりました。

この講演会がきっかけとなり、司書有志の企業や行政との連携強化、企画展示の強化、屋外利用に対するモチベーションが高まり、それを受けて岡崎市市民協働推進課にも、りぶらの課題設定、ニーズを引き出し活動の軸を定め、それに寄り添う形で支援者や協力者を募っていくという協力関係が生まれています。次年度に向け、りぶら内部(市民協働推進課、中央図書館)の当事者性を引き出し、活動の軸と担い手を生み出しながら、そこに外部の担い手をマッチングしたり、既存の利用条件を見直していくという組み立てでタスクフォースが進んでいきます。

み出し効果が高まり、りぶらの新規顧客開拓や、利用頻度増加に貢献しうることがわかります。単機能、単体の活動でのにじみ出し効果は限定的だが、青空教室やイベント実施時に集客が増加したことから、行為数、活動数を増やしたり、連携を促すことで、にじみ出し効果を促進することができることが実証された。



会議

2019年度デザイン会議

QURUWAプロジェクトへの提案・助言・評価とともに、公民連携と都市デザインのクオリティコントロールをおこなうため、まちづくり専門家と主要まちづくり4部局等から構成された戦略会議体

●メンバー

「乙川リバーフロント地区まちづくり

デザインアドバイザー」

清水義次 | 株式会社アフタヌーンソサエティ代表取締役

藤村龍至 | 東京藝術大学准教授

西村浩 | 株式会社ワークヴィジョンズ代表取締役

泉英明 | 有限会社ハートビートブラン代表取締役

伊藤孝紀 | 名古屋工業大学大学院准教授

「民間事業者」

「岡崎市職員」

●第1回

日時：2019年9月25日[水]14:00～16:00

場所：岡崎市役所分館2階202会議室

内容：

- 民間事業者のクオリティコントロールについて
民間投資による建築物のQURUWAエリアに対する影響(低層階の重要性)と建築物のクオリティコントロールをするための制度や体制について議論しました。
- QURUWAの10年後を見据えた次の5年のイメージと求められるもの
将来のQURUWAに求められるイメージと、それを実現させるための現状のテーマや課題の整理、周辺住民への情報発信について議論しました。
- 康生通りと連尺通りの社会実験について
連尺通り……道路活用に必要な要素(情報、コンテンツ、移動手段)について議論しました。
康生通り……社会実験の検証項目と企画内容について議論しました。

●第2回

日時：2019年11月13日[水]13:30～15:30

場所：岡崎市役所西庁舎7階701会議室

内容：

- リノベーションまちづくりについて
リニューアルされた籠田公園周辺の物件ツアーや康生通り、連尺通りとの連携、空き家と道路空間との一体的な活用検討について提案されました。

- 康生通りと連尺通りの社会実験を踏まえた籠田公園とりぶら間の回遊性の向上とエリアマネジメントについて
都市再生推進法人から康生通り及び連尺通りの社会実験の報告が行われ、アドバイザーからは、通りと人流分析カメラとの連携、中央緑道のストリートデザインの必要性、通りのルールや使われ方を示し、将来のまちの変化をコントロールすることの必要性について提案がありました。

●情報発信について

QURUWAという価値が共有できていないという情報発信の課題に対し、コンセプトやキャッチコピーの必要性和岡崎市のホームページから独立したWebサイトの必要性が提案されました。

●第3回

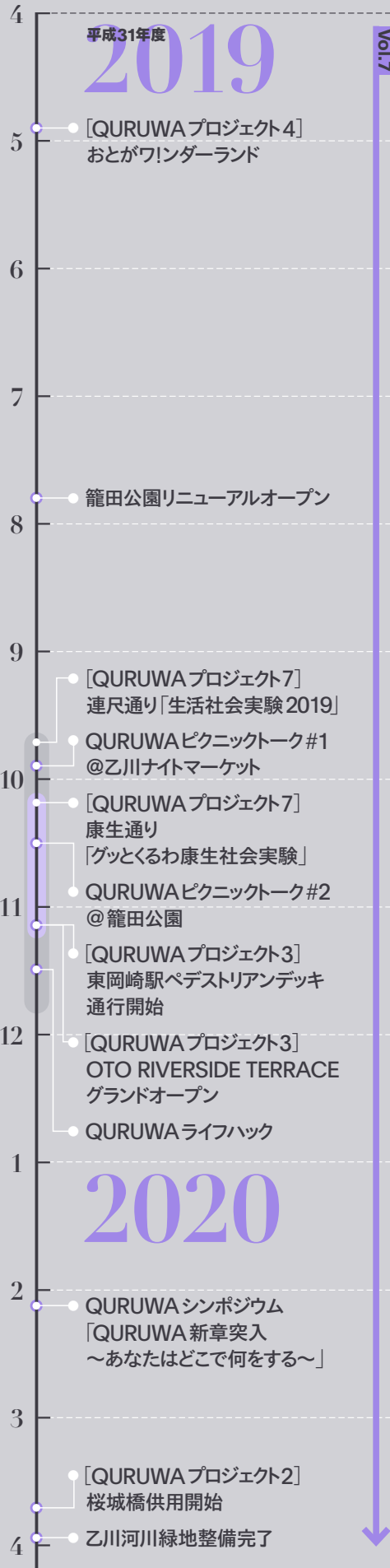
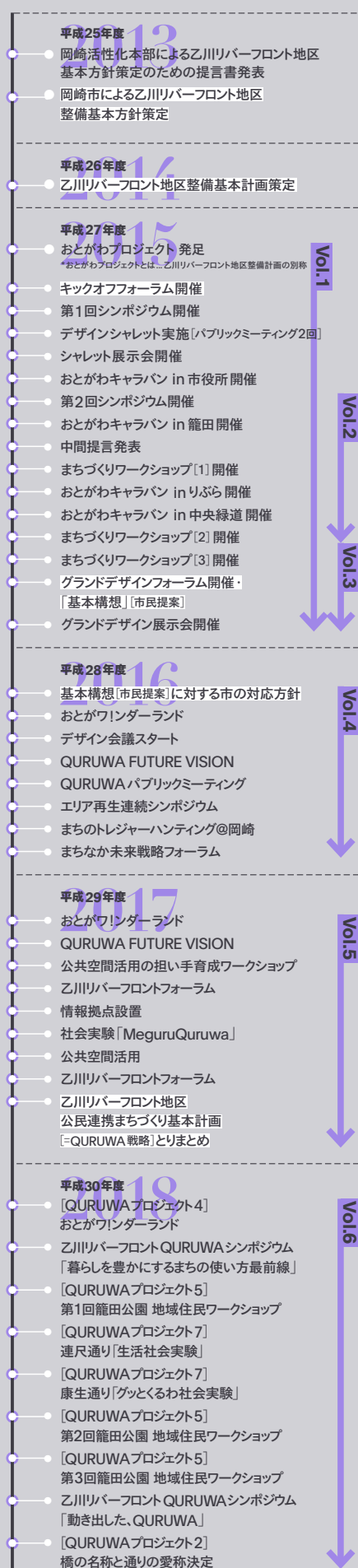
日時：2020年1月21日[火]14:00～16:00

場所：岡崎市役所西庁舎7階701会議室

内容：

- 「QURUWAとわたし」の「関係性のテーマ」について
情報発信Webサイト構築・運用のプロポーザルの提案について、管理運営方法や具体的なターゲット像を議論しました。
- QURUWAの交通計画について
QURUWAのまちづくりと連携した交通計画の必要性について議論しました。
- NTT西日本ビル1階の活用について
敷地単体ではなく、クオリティコントロールされた中央緑道との一体的な活用の必要性が指摘されました。
- その他
QURUWAエリアでのスマートウェルネスシティの展開について議論しました。

プロジェクトのタイムライン



Vol.1

キックオフフォーラム
シンポジウム
デザインシャレット
中間提言書
[収録]



Vol.2

キックオフフォーラム
シンポジウム
デザインシャレット
中間提言書
[収録]



Vol.3

おとがわプロジェクトの全体像
グランドデザインフォーラム
市民インタビュー
[収録]



Vol.4

おとがわプロジェクトの全体像 | リノベーションまちづくり | かわまちづくり | 基本設計ワークショップ | シンポジウム | まちのトレジャーハンティング | フォーラム | パブリックミーティング | 3つの会議
[収録]



Vol.5

[特集]
QURUWA 戦略
乙川リバーフロント地区のまちづくり3年目の取り組み
[収録]



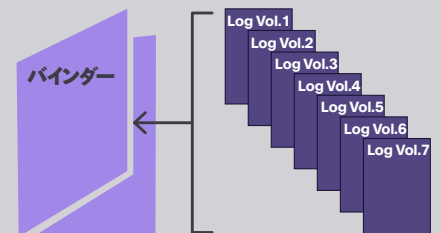
Vol.6

[特集]
暮らしを豊かにするまちの使い方とは
乙川リバーフロント地区のまちづくり4年目の取り組み
[収録]



「OTOGAWA GRAND DESIGN Log」

本冊子は、配布するバインダーに挟み、各号をまとめて保管下さい。



発行元	岡崎市
発行日	2021年2月
企画・編集	株式会社都市機能計画室
デザイン	刈谷悠三+角田奈央+平川響子/neucitora

問い合わせ先：
岡崎市都市施設課 QURUWA戦略係
tel: 0564-23-7421
mail: quruwa@city.okazaki.lg.jp
web: https://quruwa.jp